



『はだしのゲン』を27年

講談師

## 神田香織さん

Kaori Kanda

27

年前に、「マンガ『はだしのゲン』を講談にして、全国を歩き回り、多くの人に語ってきた神田香織さん。

02年には講談『チェルノブイリの祈り』を発表。

昨年7月、「反原発10万人集会」(東京)で司会を務めるなど、

戦争の悲惨さや、原発の危険性を訴え続けてきました。

東日本大震災では故郷、福島県いわき市も被災。その後の国の対応に、

「戦争の時と同じように人権がないがしろにされている」と怒ります。

被災地支援のNPO法人を立ち上げて、

「元気に明るく、しつこくたたかいたい続けたいましよう」と呼びかけます。

聞き手／写真●矢吹紀人(ルポライター)

神田香織(かんだかおり):1954年福島県いわき市生まれ。高校卒業後、誘われて講談の世界に入り、80年、二代目神田山陽門下生に。84年二つ目、89年真打昇進。86年、『はだしのゲン』を、次いで02年には『チェルノブイリの祈り』を講談に。以後、戦争や社会の矛盾を告発する語り続けている。東日本大震災後、NPO法人「ふくしま支援・人と文化ネットワーク」設立。著書に『乱世を生き抜く語り口を持つ』など。

## Profile

プロの講談師として  
戦争をテーマに語る

——『はだしのゲン』を講談にした動機は何だったのですか。

講談の世界では、3年ぐらいの前座修業のあとプロとしてスタートする二つ目になると、新作をつくることも許されます。

晴れて二つ目になったうれしさに、サイパン旅行をしたのですが、そこで第二次世界大戦の戦跡や軍隊のやったことを目の当たりにして、自分は戦争をテーマに講談をやるつもりでした。

でも、沖縄や広島・長崎などを

取材すると、あまりにも悲惨な重い話で、私にはとても語れそうもない。そう思っていたとき、原爆資料館で中沢啓治さんの『はだしのゲン』と出会ったんです。力強い作品で、悲しいだけじゃなく『何クソッ』というパワーが伝わり、こんなことは絶対に許さないぞ、っていう前向きな気持ちになれる。講談にすることを中沢さんにお願したら、とても喜んでくれました。

——香織さんのライフワークになりましたね。

とてもリアルな話なので、初めて被爆者の方たちの前で語ったとき、もし「やめてくれ」と言われたら、やめるつもりでやっただけです。でも皆さん喜んでくれて、ぜひ語り継いでくださいって逆に激励されました。

原爆投下後の悲惨な描写も延々続くのですが、聞いた人にはむしろ元気を出していただけ。子どもにも、自分たちが今、何で

戦争も原発も反対と語り続ける

も食べられるのはすごいことなんだって思ってもらえる。

私自身、「ゲン」のおかげで辛いことも乗り越えられたし、踏まれても強く生きる哲学を教えられました。この作品に出合っていなかったら、チェルノブイリや米軍ジェット機墜落の話なども語っていなかったと思います。

### チェルノブイリの講談で 日本での事故を警告

——『チェルノブイリの祈り』は、事故後16年目の02年に発表された講談ですね。

『はだしのゲン』を作っていた86年4月に、チェルノブイリ事故がありました。4日後には放射能



ホームページより

が日本に来て、食品に不安を感じて大騒ぎになった。そのとき、チェルノブイリのことも講談にしなければと思ったのです。

ベラルーシの作家スベトラナさんが、事故処理にあたった消防士の妻たち取材して書いた話が、元になっています。消防士たちは、2週間後には被曝が原因で死んでいく。医者や看護師も二次被曝で死に、6カ月だった胎児は、生まれてすぐに肝硬変で死ぬ。本を読みながら、辛くて涙が止まりませんでした。

でもなおさら、講談にしなければと思つて、スベトラナさんをお願いして快諾を得ました。

——これも感動的な講談です。

10年前、鎌田實医師たちがスベトラナさんを日本に招いたとき、本人の前で語ることができました。講談という大衆に訴える手法でやっているのは、とてもうれしいと言ってくれました。

でも、最初は皆さん、チェルノ

ブイリなんて他人事。そこで、話の最後に日本で原発事故が起きる架空の話をつけたんです。「時はいつ、太平洋に面した原子力発電所が事故を起こし、配管が破断して炉心が溶融。ついに政府は非常事態宣言を余儀なくされました」つて。それを聞くと、皆さんびっくりしていました。

### 原発事故を忘れず 多くの人とつながつて

——その原発事故の話が、現実になってしまいました。

はい。私の故郷も被災しました。悔しいのは、チェルノブイリでは子どもたちをバスで逃がし、30km圏内は立ち入り制限をしているのに、日本は全然やらないことです。広島に原爆が落とされた時と同じで、人権意識がまったくないので。

でも、私が落胆しても始まらない。国はこの苦しみを忘れさせようとしているから、忘れないように、少しでも伝えていかなければ

いけないと思いました。

——NPOを設立して福島支援の活動 始めたのですね。

低線量被曝の中で生活している子どもたちの保養に力を入れています。免疫力を落とさないよう、玄米を食べておなかの底から声を出し、人とつながっていく。講談を聞きに来た人たちにも、「力を込めてアッと大きな声を出して、この声で、原発再稼働反対で叫んでいこう」つてやっています。

私はどこへ行っても、「たたかいは楽しく明るくしつこく」をキャッチフレーズにしてやっています。ほそぼそでもいいから、とにかくネットワークを無数に作っていくことが大切だと思います。

9月には、原発事故に遭った子どもたちや漁師を題材にした「福島語り」を始めます。弟子にも語らせて、語り部をどんどん増やしていこうと思つています。